随想　周期性について

～歴史の周期性と希望的観測～

加藤　宏光

以前に周期性について何かの機会で触れたことがある。

実際、人間は周期性のある現象に取り囲まれて生きている。そして、一人ひとりが過去に経験した周期に引きずられ、影響を受けながら生きている。しかし、過去の周期に無関心に生きている人も少なくない。

思い起こせば、わが国のバブル景気の時期にはうら若き女性から大学生に至るまで、株に浮かれていたように感じられる。

当時、新宿の紀ノ国屋書店に立ち寄ると、二階の株に関するジャーナル・コーナーにこうした若い世代の人が株のチャートを立ち読みしている姿を目にして『いかにも時代を反映している姿だ』と感心したものであった。

そして、数年後のバブル崩壊で当時三万円もした株価が一万二、〇〇〇円ほどにも下がり、養鶏業界でも株に依存した資金繰りの生産者が大きなダメージを受けたものであった。

日本人だけでなく、世界の人々がバブル景気の恐ろしさを実感したはずである。

それから一〇年を過ぎた頃、アメリカのサブプライム・ローン（銀行が土地、不動産向けに貸し出した不安材料のある債権をヘッジファンドが買い取り、他の債権と組み合わせて、言わば目隠しをして、販売した債権）を代表とした怪しげなデリバティブ・テクニックで一世を風靡したアメリカ経済に依存した日本をはじめとする各国の経済が、バブルに踊り始めていた。

著者は、周期性に関して比較的敏感であったため、いくら「ニューエコノミー」と喧伝されても、このような経済がいつまでも続くとは信じられなかった。

そしてリーマン・ショック、その後の一年は周知のごとくである。

先に述べたように、自然世界が独自の周期性を有していることは明らかな事実である。富士山は二八〇年を周期に爆発してきた。

太陽は一一年周期で黒点が増加し減少している。経済に関しても、七〇年周期のコンドラチェフ循環、一二年周期のジュグラー循環等これまでに確認されたものがあることを紹介した。

この概念から、二〇〇四年に七九年ぶりにわが国に発生したＨＰＡＩが、そうそう高頻度に日本を襲うことはないであろうと予測したことがあっ

た。

しかし、翌年の弱毒タイプH5N2の発生はその発生原因に明確でないところがあることから、事例を別としても、二〇〇六年に宮崎県と岡山県で発生したHPAIH5N1については、著者の想像を越えるものであった。

今にして思えば、世界の鳥インフルエンザ拡散の条件が過去と大きく異なっていたことや、それが止むにやまれぬ対応であったことはそれとして、アジア諸国等で実施された鳥インフルエンザワクチンの実施で、いわゆるサイレント・インフェクション状態で鳥インフルエンザ・ウィルスが拡散してゆくことが考慮されていなかったことを、大いに反省している。

確かに歴史に周期性があることは間違いない。しかし、一般的な人間が周期を理解し、それを元に予想、予測をすると往々にして外れるものである。

なぜか？

周期というものついて考えさせられる機会があった。

二、四、六、□

と並んだら□にはなにが来るか、と問われたら、大方のひとは、〝八〟と答えるであろう。著者にしてもそうである。しかし、次のような答えがある。

二、四、六、二七

なぜか？　その答えは、

二、四、六、二七、　二、四、六、二七…

と続く循環数列であるから…

高校時代を思い出して頂きたい。確かに、数列という概念があった。では、

二、四、六、二七、　二、四、六、二七、□

の□に何が入るか？

著者は、〝二〟と予想した。しかし、答えは

二、四、六、二七、　二、四、六、二七、一二三

二、四、六、二七、　二、四、六、二七、一二三、　二、四、六、二七、　二、四、六、二七、一二三というように、〝二、四、六、二七、　二、四、六、二七、一二三〟を循環単位とする循環数列である…

実は、こうした設問では、□に何を持ってきても当てはまる。そして、□に何が入るのかは、誰にもわからない。

先の七九年ぶりにわが国を襲った強毒タイプHPAI発生に際して、『こうしたことが七九年ぶりに起きたなら、少なくとも七九年とは言わずも、しばらくは起きるまい』と予測した著者は、単純な循環感覚に頼っていたことになる。しかし、自然はそのような単純な循環ばかりで形成されていない。

一九九三～五年に始まった、これまでのH5N1亜型鳥インフルエンザ発生騒動は一九二七年当時から考えて、回帰的に起きる一連の団子状態と受け取り、その周期は団子がどれくらいの周期で再発するか、という観点から論じなくてはならないものであるのかもしれない。

それほどに予測・予想は難しいが故に、《悲観的に予想していれば何が起きても実質あるいは道義的な責任を感じなくてもすむ》のである。これが、悲観的予想が多い要因であり、また、マスコミも悲観的（悲劇的）予想・予測を立てるほど、受けるという事情がこれに拍車をかけているのであろう。

悲観的観測のもとに、前向きの活力をみなぎらせる向きが大多数であれば、言うことはない。しかし、普通の人々は悲観的観測では守りに入る。

著者は、これからも敢えて希望的観測を続けたい。一時期間違っているようにとらえられても、さらに長期的には予想の方向へ向かっていることが多いのだから…。

《明けぬ夜はない》、と言うではないか!!